

随筆

彩り

実政 梨江

真つ直ぐな眼差しに雑音のない世界。瑞々しいとはこういうことなのだろうか。

小学校に入学したての春。もう三十年も前だというのに、それはとても鮮やかな景色。私の背丈から見ると、ほとんど雲のない青空に映える、淡いピンクの花びらを付けた堂々たる木々が、校舎の姿をいつぱんに霞めている。桜が満開だ。校門を抜けてすぐの石段で撮った写真の背景は、これからの愉快な学校生活を予感させるように燦燦と光が射しこんでいた。

当時の写真を手に取る私は、目を細めて眺めている。何物にも代え難い幸せな時間だ。おろしたてでしっかり糊のついた大きめの濃紺の制服に、首元から少し見えている丸襟の真つ白なブラウス。山吹色の通学帽子をかぶったはにかんでいる子ども。せっかくの入学記念写真だからピースサインくらいすればいいのに。それが六歳の私である。

あの頃といえば、ひどい猫背でかつ臆病な私は、ランドセルを背負うにも一苦労だったエピソードがある。垂直に背負うランドセルが下に落ちてしまうのが心配で、猫背をさらに折りたたみ、わざわざ体を九十度に曲げ、背中の上にランドセルを置いたような格好でしばらくの間歩いていた。折れ曲がって通学する姿は、心配よりも滑稽な光景だったと母はいまだに言う。

時を同じくして、朝礼前にいつも流れる綺麗な音楽があった。幼な心を一瞬で虜にさせる優美な音色だ。

その曲名を知ったのは、中学生になってからだだったと思う。家でピアノの練習中に、偶然知ることになる。

メンデルスゾーン「春の歌」。

数小節弾いただけで、脳裏にしまいこんでいたものが呼び起こされたのだ。

なんと柔らかい旋律なのだろう。不思議と鋭さがどこにもない。そのまま弾くのもいいが、私はソフトペダルを踏めばより一層、あの頃に聴いた音に近いと瞬時に思った。弾いていると暖かく、まるで春の風に舞っているような弾んだ心地になる。

毎日がモノクロームで鬱々としていた中学生の私は、一気にタイムスリップし、六歳の頃に戻っていた。何もかも全部、すうっと違和感なく私は過去に戻るのだ。聴いた音を

再現できた嬉しさのあまり時間を忘れて弾いた十四歳の夏休み。楽しみが一つできた気がしてわくわくした。

もう一曲、印象に残る音色がある。

モーツァルト「交響曲 第四十番 第一楽章」

そつと目を閉じると、グラウンド一面にびつしりと積もった白い雪景色へと変貌する。

「午前中は授業をやめて、雪遊びにしましょう」と先生の声。

人一倍寒がりで、外に遊びに行くななんて…と躊躇いながら窓の外を一人眺めていた時、元気に誘い出してくれたクラスメイト。

「一緒に雪合戦しよう」気が付くと私はクラスメイトにがつしりと腕を引っ張られて外に出ていた。わあわあと手袋がびつしりとするほど夢中になつて雪合戦をしたこと。教室に戻る頃には寒さなんてすっかりどこかへ飛んでいた。濡れた手袋を教室で乾かすと、帰る頃にはバリバリに乾ききっていた。

そんな寒い日の掃除時間に流れてきた、マイナー調のストリングスからドラマチックに始まる旋律。凍てつく冬そのものであった。だけれど同時に、みんなの輪に入れてもらつて駆け回っている、無邪気な自分もそこにいるのだ。決して寂しくなんてない。周りには仲間がたくさんいる。

大人になるにつれて、子どもの頃のような純真な心は急激に擦り減っていった。

それでも毎年、「春」になるとうららかな春の歌がふいに流れてくるし、「冬」になると頑張れ。と鼓舞するように流れてくるあの交響曲がある。

そんな都合のいい記憶なんてあるものか。どんなに他人（ひと）が嗤ったとしても…。思い出が心を癒してくれるのは確かだ。

私にとって音。色。景色。匂い。加えて蒸しとした小学校の教室の熱気。五感に染み込んだ数々の出来事は忘れることもできないし、忘れてはいけないのだ。

せっかく書きためていた日記帳は、ペンのインクが裏写りしてしまい全然読めなくなつてしまった。しかし記憶は染み込んでも、染み込んだ分だけ当時に還ることができる。

どこからか、甘い金木犀の香りが部屋じゅうに立ちこめてきた。高い空が今日も青い。私は、アルバムの幾枚もの在りし日の写真を見つめる。センチメンタルと言われてもいい。いつまでそんなことをやっているのと呆れられてもいい。彩りに満ちた追憶の一場面が、現実の燦ぶった日常を薄めてくれる。